

大木さん (大学生)
大浦さん (大学生)
官沢先生

篠田教授が周囲を見回し、ポケットからメモ帳を取り出す。

篠田教授 (メモ帳を開いて) 東京都新宿区歌舞伎町一の十九の一。ちょうどこの辺りだな。

そこへ、坂口助手がやってくる。

坂口助手 篠田教授、やっぱりここに間違いないみたいです。

篠田教授 ありがとう、坂口くん。学生たちはどうした。

坂口助手 今、来ます。(奥に向かつて) みんな、急ぎなさい!

そこへ、岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さん・大浦さんがやってくる。岡田さんと小川さん以外は、それぞれトランクやリュックを持っている。

小川さん 篠田先生、ちょっと休憩にしませんか。私、喉が乾いちやって。

前田さん そのこの自販機で、お茶でも買えば?

中村さん 何言ってるの。今、授業中よ。

小川さん
中村さん
小川さん
岡田さん
小川さん
岡田さん
中村さん
岡田さん
中村さん
岡田さん
小川さん
中村さん
岡田さん
前田さん
篠田教授
小川さん
篠田教授
小川さん
篠田教授
岡田さん

（篠田教授に）さっき、ドトールがありましたよね？ 私、ドトールのア
イスコーヒートミラノサンドAには目がないんです。

あなた、食事までしたいって言うの？
（篠田教授に）必ず五分で戻ります。一秒でも過ぎたら、単位はいりませ
ん。

小川さん、そんなこと、言っちゃっていいの？

大丈夫です。五分あれば、ミルクレープまで行けます。

そういうことじゃなくて、あなた、先月の発表、大失敗したでしょう？

ただでさえ単位が危ないのに、食事がしたいなんてよく言えるわね。

あら、そういう岡田さんはどうなのよ。

どうって？

私、見てたわよ。その自販機で、サッポロ黒ラベルを買ったの。

え？信じられない。

大学からここまで、何分歩いたと思う？ 三十分よ。マラソン選手だって、

三十分も走ったら、給水するでしょう？

でも、ビールは飲まないでしょう。

諸君。私のゼミの研究テーマは、宮沢賢治だ。ということは、諸君は宮沢

先生に興味がある。間違いないね？

ええ。

小川くんは、宮沢先生が好きか。

はい。初めて『銀河鉄道の夜』を読んだ時は、涙が出ました。

岡田くんは？

私は、作品そのものより、賢治の生き方が好きです。自分以外の人のため

篠田教授

岡田さん

篠田教授

岡田さん

坂口助手

篠田教授

坂口助手

中村さん

小川さん

前田さん

坂口助手

青山さん

坂口助手

岡田さん

青山さん

藤岡さん

に必死で働いて。

だったら、考えてみてくれ。もしここに宮沢先生がいたら、諸君のことをどう思うだろう。

もつとまじめにやれって怒るかもしれないね。でも、昔と今じゃ、時代が違うし。

宮沢先生は宮沢先生、私は私ってことか。

そうは言いませんけど。

篠田教授、一人足りません。

え？

ゼミのメンバーは十人、教授と私を入れたら十二人。それなのに、ここには十一人しかいません。

でも、大学を出る時は十二人いたはずですよ。

わかった。きつと一人でミルクレープを――

あなたは黙ってなさい。

誰よ。誰がいなくなったの？

わかった。菅野くんですよ。

え？

何よ。菅野のやつ、また、単独行動？

違いますよ。あの人、荷物が多いから、歩くスピードが遅くて。

(奥を見て) あ、やっと来た。

そこへ、菅野くんがやってくる。リュックを背負い、両手にトランクを持っている。

菅野くん
坂口助手
菅野くん
岡田さん
菅野くん
中村さん
坂口助手
篠田教授
坂口助手

ああ、やっと追いついた。
遅いじゃないの、菅野くん。
こんな荷物を持たされたら、速く歩けませんよ。
仕方ないでしょう？　うちのゼミには、あなたしか男がいないんだから。
僕より力の強そうな人はいっぱいいると思うけど。
そういうことを言うから、余計に苛められるのよ。
篠田教授、これで全員揃いました。
ありがとう、坂口くん。諸君、今日の目的地はここだ。東京都新宿区歌舞伎町一の十九の一。私の研究によれば、賢治島はここにある。
全員で、この辺りを探してみしよう。十五分後に、もう一度集合をけます。それじゃ、解散。

岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さん
・大浦さんが舞台上を探し始める。

菅野くん
篠田教授
菅野くん
坂口助手
篠田教授
菅野くん
坂口助手

あの、探すって、何を？
賢治島だ。
ということは、『賢治島探検記』は、賢治島で探検する話じゃなくて——
賢治島を探す話よ。決まってるでしょう？
（菅野くんに）このことは、四月の最初の授業で言っておいたはずだぞ。
君は何を聞いていたんだ。
バイトが忙しくて、あんまり授業に出てないんで。
たまに出ても、虫の本ばかり読んでるし。だから、単独行動の菅野なん

菅野くん
篠田教授
菅野くん
坂口助手
菅野くん
篠田教授
菅野くん
坂口さん
菅野くん
篠田教授
温井さん
篠田教授
大木さん
大浦さん
三人

て呼ばれるのよ。

僕のことより、賢治島のことです。賢治島っていうからには、やっぱり島ですよね？ でも、ここは新宿ですよ。新宿に島はないでしょう。

ランゲルハンス島はどこにある。

ランゲルハンス島？

ランゲルハンス島は、人の体の中にあります。臍臓の中で、インスリンやグルカゴンなどのホルモンを分泌しています。

（菅野くん）わかったか。

それはつまり、こういうことですか。賢治島は、マウイ島やオアフ島や佐渡島みたいな、海に浮かんでいる島ではないと。

イーハトーブはどこにある。

イーハトーブ？

あなた、まさか、イーハトーブも知らないの？

知ってますよ。イーハトーブっていうのは、岩手のことです。宮沢賢治は、自分が生まれた岩手のことを、エスペラント語風に、イーハトーブと呼んでいた。そうですね？

三十点。

『注目の多い料理店』の新聞案内にはこう書いてあります。「イーハトーブは一つの地名である。その地点を求むるならばそれは」

「大小クラウスたちが耕していた、野原や、少女アリスがたどった鏡の国と同じ世界の中」

「テパインタール砂漠のはるか北東、イヴン王国の遠い東と考えられる」

「じつはこれは著者の心象中に、このような状景をもって実在したドリー

篠田教授
菅野くん
坂口助手
菅野くん
篠田教授
菅野くん
坂口助手
菅野くん
藤岡さん
篠田教授
坂口助手
大木さん
篠田教授
坂口助手
温井さん
坂口助手
青山さん
坂口助手
前田さん

ムランドとしての日本岩手県である」
三百点。

で、それがどうかしたんですか。
イーハトーブは、現実の岩手じゃない。宮沢先生の心の中の岩手なの。でも、そのモデルになった場所は、現実の日本に存在したはず。篠田教授は、それを賢治島と名付けたの。

よくわからないなあ。イーハトーブのモデルは、岩手じゃないんですか？
そうとは限らない。
どうして？

なぜなら、宮沢先生は日本中を旅したからよ。作家は自分の行く先々で、題材を手に入れる。賢治島はもしかしたら、ここかもしれないの。
まさか。

篠田先生、これを見てください。（と五銭銅貨を差し出す）
うむ、これは。

五銭銅貨ですね。『祭の晩』に出てきた白銅かもしれません。
篠田先生、このどんぐりは？（とどんぐりを差し出す）

坂口くん。

『どんぐりと山猫』に出てきたやつじゃないかな。

坂口さん、このパンは？（と食パンを差し出す）

『貝の火』に出てきた、角パンよ。

この鉛筆は？（と鉛筆を差し出す）

『風の又三郎』に出てきた木ペンよ、きつと。

この手拭いは？（と手拭いを差し出す）

篠田教授
菅野くん
篠田教授

菅野くん

坂口助手
菅野くん
坂口助手

菅野くん
篠田教授
藤岡さん
篠田教授
十二人

篠田教授・坂口助手・菅野くん・前田さん・小川さん・中村さん・青山さん・温井さん・大木さん・大浦さんが去る。岡田さん・藤岡さんは残る。

存在しなかったら、淋しいからだ。淋しい？ そんなの、理由になってない。

イーハトーブのモデルは、もちろん岩手だ。だから、岩手にはたくさん賢治島がある。しかし、私たちの住む街にも、きつと賢治島はある。街角を曲がれば、ジョバンニが駆けてくるかもしれない。裏山に登れば、銀河ステーションがあるかもしれない。そう思えなければ、淋しいからだ。その気持ちは僕にもわかりません。でも、ここは新宿ですよ。新宿にジョバンニはいない。

そこまで言うなら、仕方ないわ。教授、そろそろ授業を始めましょう。

ここですか？

そうよ。ここが賢治島かどうか、みんなで確かめるのよ。さあ、準備を始めよう。

でも、確かめるって、どうやって。

藤岡くん、トッパバッターは君だ。君が拾ったのは、白銅だったな？

そうです。『祭の晩』に出てくる、白銅です。

よし、じゃ、始めよう。

『賢治島探検記』。

岡田さん・藤岡さんが、舞台の隅に転がっていたリングボックスを二つ持ってきて、中央に並べる。

藤岡さん
二人

『二人だけの
祭の晩』

藤岡さんがトランクを開けて、がま口を取り出す。

岡田さん

山の神の秋の祭りの晩でした。亮二はあたらしい水色のしごきをしめて、それに十五銭もらつて、お旅屋にでかけました。「空気獣」という見世物が大繁盛でした。それは、髪を長くして、だぶだぶのずぼんをはいたあばたな男が、小屋の幕の前に立って、「さあ、みんな、入れ入れ。」と大威張りでどなっているのです。亮二が思わず看板の近くまで行きましたら、いきなりその男が、「おい、あんこ、早く入れ。銭は戻りでいいから」と亮二に叫びました。亮二は思わず、つと木戸口を入れてしまいました。すると小屋の中には、高木の甲助だの、だいぶ知っている人たちが、みんなおかしいようなまじめな顔をして、まん中の台の上を見ているのです。台の上に空気獣がねばりついていました。

藤岡さん

それは大きな平べったいふらふらした白いもので、どこが頭だか口だかわからず、口上云いがこつち側から棒でつつくと、そこは引っこんで向うがふくれ、向うをつつくとこつちがふくれ、まん中を突くとまわりがたがいふくれました。

岡田さん

亮二は見つともないので、急いで外へ出ようとしましたが、土間の窪みに下駄がはいってあぶなく倒れそうになり、隣りの頑丈そうな大きな男にひどくぶつつかりました。びっくりして見上げましたら、それは、へんな蓑のようなものを着た、顔の骨ばって赤い男で、向うも愕いたように亮二を見おろしていました。

藤岡さん
岡田さん

その眼はまん円で煤けたような黄金いろでした。亮二が不思議がつてしげしげ見ていましたら、にわかはその男が、眼をぱちぱちととして、それから急いで向うを向いて木戸口の方に出ました。亮二もついて行きました。その男は木戸口で、堅く握っていた大きな右手をひらいて、十銭の銀貨を出しました。亮二も同じような銀貨を木戸番にわたして外へ出ましたら、従兄の達二に会いました。

藤岡さん
岡田さん

「お前はこの見世物の看板を指さしながら、
「お前は、実はね、牛の胃袋に空気をつめたものだそうだよ。こんなものにはいるなんて、おまえはばかだな」

藤岡さん
岡田さん

亮二は急いでそこをはなれました。
「それなら向うのひのきの陰の暗い掛茶屋の方で、なにか大きな声がして、みんながそつちへ走って行きました。亮二も急いでかけて行って、みんなの横からのぞき込みました。」

藤岡さん
岡田さん
藤岡さん
岡田さん
藤岡さん
岡田さん
藤岡さん
岡田さん
藤岡さん
岡田さん
藤岡さん
岡田さん

するとさっきの大きな男が、しきりに村の若い者にいじめられているのでした。額から汗を流してなんべんも頭を下げていました。

「貴様んみたいな、他処から来たものに馬鹿にされて堪つか。早く銭を払え、銭を。無のか、この野郎。無なら何して物食った。こら」

男はひどくあわてて、どもりながら

「た、た、た、薪百把持って来てやるがら」

掛茶屋の主人は、それをよく聞きとりかねて、

「何だと。たった二串だと。あたりまえさ。団子の二串やそこら、呉れてやってもいいのだが、おれはどうもきさまの物云いが気に食わないのでな。やい。何つうつらだ。こら、貴さん」

男は汗を拭きながら、

「薪をあとで百把持って来てやっから、許して呉れろ」

すると若者が怒ってしまい

「うそをつけ、この野郎。どこの国に、団子二串に薪百把払うやづがあつか。全体きさんどこのやつだ」

「そ、そ、そ、そ、そいつはとても云われない。許して呉れろ」

男は黄金色の眼をぱちぱちさせて、汗をふきふき云いました。一諸に涙もふいたようでした。

「ぶん撲れ、ぶん撲れ」

誰かが叫びました。

亮二はすっかりわかりました。

（ははあ、あんまり腹がすいて、それにさっき空気獣で十銭払ったので、あともう銭のないのも忘れて、団子を食ってしまったのだな。泣いている。

岡田さん

悪い人でない。却って正直な人なんだ。よし、僕が助けてやろう）
亮二はこつそりがま口から、ただ一枚残った白銅を出して、それを堅く握って、知らないふりをしてみんなを押しわけて、その男のそばまで行きま

藤岡さん

した。
男は首を垂れ、手をきちんと膝まで下げて、一生けん命口の中で何かもにやもにや云っていました。

岡田さん

亮二はしやがんで、その男の草履をはいた大きな足の上に、だまって白銅を置きました。

藤岡さん

すると男はびっくりした様子で、じつと亮二の顔を見下していました。が、やがていきなり屈んでそれを取るやいなや、主人の前の台にぱちつと置いて、

岡田さん

「そら、銭を出すぞ。これで許して呉れろ。薪を百把あとで返すぞ。栗を八斗あとで返すぞ」

藤岡さん

云うが早いか、いきなり若者やみんなをつき退けて、風のように外へ遁げ出してしまいました。

岡田さん

「山男だ、山男だ」
みんなは叫んで、がやがやあとを追おうとしましたが、もうどこへ行った

藤岡さん

か、影もかたちも見えませんでした。

二人

風がごうごうつと吹き出し、まっくろなひのきがゆれ、掛茶屋のすだれは飛び、あちこちのあかりは消えました。

岡田さん

かぐらの笛がそのときはじまりました。けれども亮二はもうそっちへは行かないで、ひとり田圃の中のほの白い路を、急いで家の方へ帰りました。ぼんやりしたすばるの星がもうよほど高くのぼっていました。

藤岡さん

岡田さん

藤岡さん

岡田さん

藤岡さん

岡田さん

藤岡さん

家に帰って、廐の前から入って行きますと、お爺さんはたった一人、いろいろに火を焚いて枝豆をゆでていましたので、亮二は急いでその向う側に座って、さっきのことをみんな話しました。

「ははあ、そいつは山男だ。山男というものは、ごく正直なもんだ。おれも霧のふかい時、度々山で遭ったことがある。しかし山男が祭を見に来たことは今度はじめてだろう。はっはっは」

その時、表の方で、どしんがらがらと云う大きな音がして、家は地震の時のようにゆれました。亮二は思わずお爺さんにすがりつきました。

お爺さんも少し顔色を変えて、急いでランプを持って外に出ました。亮二もついて行きました。ランプは風のためにすぐに消えてしまいました。

その代り、東の黒い山から大きな十八日の月が静かに登って来たのです。見ると家の前の広場には、太い薪が山のように投げ出されてありました。

お爺さんは俄かに手を叩いて笑いました。

「はっはっは、山男が薪をお前に持って来て呉れたのだ。俺はまたさっきの団子屋にやるという事だろうと思っていた。山男もずいぶん賢いもんだな」

亮二は薪をよく見ようとして、一足そっちへ進みましたが、忽ち何かに滑ってころびました。見るとそこらいちめん、きらきらきらする栗の実でした。

「おじいさん、山男は栗も持って来たよ」

「栗まで持って来たのか。こんなに貰うわけには行かない。今度何か山へ持って行って置いて来よう。一番着物がよかろうな」

「おじいさん、山男はあんまり正直でかあいそうだ。僕何かいいものをや

岡田さん

藤岡さん

岡田さん

二人

りたいな」

「うん、今度夜具を一枚持って行ってやろう。山男は夜具を綿入の代りに着るかも知れない。それから団子も持って行こう」

「着物と団子だけじゃつまらない。もつともつといいものをやりたいな。」

山男が嬉しがつて泣いてぐるぐるはねまわって、それからだが天に飛

んでしまふ位いいものをやりたいなあ」

おじいさんは消えたランプを取りあげて、「うん、そういういいものあれ

ばなあ。さあ、うちへ入って豆をたべろ。そのうちに、おとうさんも隣り

から帰るから」と云いながら、家の中にはいりました。亮二はだまって青

い斜めなお月さまをながめました。

風が山の方で、ごうつと鳴って居ります。

紙ヒコーキが三つ飛んでくる。後を追って、温井さん・大木さん・大浦さんがやってくる。三人が紙ヒコーキを飛ばす。そこへ、前田さん・小川さん・青山さんがやってくる。三人が紙ヒコーキを飛ばす。そこへ、篠田教授・坂口助手・岡田さん・中村さん・藤岡さんがやってくる。坂口助手はバッグを持っている。十一人が紙ヒコーキを飛ばす。そこへ、菅野くんがやってくる。

菅野くん

あの、皆さん、何をしてるんですか？

坂口助手

見ればわかるでしょう？

菅野くん

いい年をした大人が、紙ヒコーキなんか飛ばして、恥ずかしくないんですか？

前田さん

別に。(小川さんに)楽しいよね？

小川さん

話しかけないで。今、新型機を建造中なんだから。

篠田教授

菅野くんも作りたまえ。一番遠くまで飛ばしたら、勝利者賞をやるぞ。

菅野くん

勝利者賞って？

篠田教授

単位だ。

菅野くん

単位？　じゃ、今は休憩時間じゃなくて――

坂口助手

授業中よ。私たちは賢治島を探すために、紙ヒコーキを飛ばしてるの。

十一人が紙ヒコーキを飛ばす。

篠田教授

うむ、今のところ、勝利者賞に一番近いのは、藤岡くんだな。

菅野くん

甘い甘い。僕が作れば、百メートルは飛びますよ。

岡田さん

嘘つきは黙ってな。

菅野くん

嘘つきだと？ その言葉、忘れるなよ。

菅野くんが去る。

篠田教授

諸君、そろそろ本番だ。せーの。

十一人が紙ヒコーキを飛ばす。そこへ、菅野くんが戻ってくる。巨大な紙ヒコーキを持っている。

菅野くん

甘い甘い。その程度の距離じゃ、飛んだとは言えませんが。まるで、『トイ・ストーリー』のバズ・ライトイヤーです。「カッコつけて、落ちてるだけだ」。

中村さん

菅野くん、それは何？

菅野くん

よくぞ、聞いてくれました。僕が小学校時代に開発した、スーパー紙ヒコーキ。普通の紙ヒコーキとは比較にならないから、スーパーなんです。

青山さん

大きさが？

菅野くん

違いますよ、飛距離です。見ててくださいよ。せーの。

菅野くんが紙ヒコーキを飛ばす。

岡田さん さつき、百メートルは飛ぶって言わなかったつけ？
菅野くん もう一度、やらせてください。そうすれば、必ず——

そこへ、紙ヒコーキが飛んでくる。大木さんが拾う。

大木さん これ、何か書いてある。(と紙を広げて) 手紙だ。
坂口助手 おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

篠田教授・菅野くん・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん
・温井さん・大浦さんが去る。

大木さん 「かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。
あした、めんどなさいばんしますから、おいで
んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

坂口助手

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

大木さんがバッグを開けて、手紙をしまう。

坂口助手

二人
坂口助手

大木さん

坂口助手

大木さん

坂口助手

大木さん

坂口助手

大木さん

坂口助手

ね床にもぐってからも、山猫のいやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっています。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

『どんぐりと山猫
と馬車別当』

すきとおった風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい」

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ」

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつと調べてみよう。

栗の木ありがとう」

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい」

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。ふえふき、ありがとう」

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白い

きのこが、どってこどってこどってこどってこと、変な楽隊をやっていました。一郎はからだをかがめて、

大木さん
坂口助手
大木さん

坂口助手

大木さん

坂口助手

大木さん
坂口助手
大木さん
坂口助手

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい」

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましよ」

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行つてみよ。きのこ、ありがとう」

一郎がすこし行きましたら、まっ黒な樫の木の方へ、あたらしいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、汗をぼとぼとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもつて、だまつてこつちをみていたのです。その男は、上着のような半天のようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊のよう、ことにそのあしききときたら、ごはんをもるへらのかたちだったので、一郎は気味が悪かつたのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか」

「山ねこさまはいますぐに、ここに戻つてお出やるよ。おまえは一郎さんだな」

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか」

「そんだら、はがき見だべ」

「見ました。それで来たんです」

「あのぶんしよは、ずいぶん下手だべ」

大木さん 「さあ、なかなか、うまいようでしたよ」

坂口助手 「あの字もなかなかうまいか」

大木さん 「うまいですね。五年生だってあのくらいには書けないでしょう」

坂口助手 「五年生っていうのは、尋常五年生だよ」

大木さん 「いいえ、大学の五年生ですよ」

坂口助手 「あのはがきはわしが書いたのだよ」

大木さん 「ぜんたいあなたはなにですか」

坂口助手 「わしは山ねこさまの馬車別当だよ」

二人 そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にて

坂口助手 いねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもって、ふりかえって見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織のようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。

そこへ、篠田教授がやってくる。

大木さん 「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう」

篠田教授 「こんにちは、よくいらっしやいました。じつはおとことから、めんどうなあらそいがおこって、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。どうもまい年、この裁判でくるしみます」

坂口助手 そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金

大木さん
馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんと振りましました。いろの円いものが、ぴかぴかひかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあ、みんなにか云っているのです。

坂口助手がバッグを開けて、鐘を取り出し、激しく振る。

大木さん
音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこしすこしかになりました。

篠田教授
坂口助手
「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかおりをしたらどうだ」
「いえいえ、だめです、なんといい加減になかおりをしたらどうだ」
「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです」

篠田教授
「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ」
「やかましい。ここをなるところえる。しずまれ、しずまれ」

坂口助手が鐘を激しく振る。

篠田教授
坂口助手
「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ」
「いえいえ、だめです。なんといい加減に仲なおりしているのがいちばんえらいのです」

篠田教授 「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです」
「そうでないよ。大きなことだよ」
篠田教授 「やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ」

坂口助手が鐘を激しく振る。

篠田教授 「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ」
坂口助手 「いえ、いえ、だめです。あたまのものが……」
篠田教授 「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ」

坂口助手が鐘を激しく振る。

篠田教授 「このとおりです。どうしたらいいでしょう」
大木さん 「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです」

篠田教授 「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ」

坂口助手 「どんぐりは、しんとしてしまいました。それはそれはしんとして、堅まつてしまいました。」
篠田教授 「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけしてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉

大木さん
篠田教授

判事になってください。これから、葉書が行ったら、どうか来てくださ
いませんか。そのたびにお礼はいたします」
「承知しました。お礼なんかいきりませんよ」
「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかわりま
すから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁
判所としますが、ようございますか」

大木さん
篠田教授

「ええ、かまいません」
「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明
日出頭すべしと書いてどうでしょう」

大木さん
篠田教授

「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめたほうがいいでしょう」
「それでは、文句はいままでのおりにしましょう。そこで今日のお礼で
すが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすき
ですか」

大木さん
篠田教授

「黄金のどんぐりがすきです」
「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかつたら、めっきのどん
ぐりもまげてこい。はやく」
別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

坂口助手がバッグを開けて、鐘をしまい、どんぐりの入った一升枴を取り出す。

坂口助手
篠田教授
大木さん

「ちようど一升あります」
「よし、はやく馬車のしたくをしろ」
白い大きなきこのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてな

篠田教授
坂口助手

んだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。
「さあ、おうちへお送りいたしましょう」
二人は馬車にのり、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。
ひゆう、ぱちっ。
馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのようにぐらぐらゆれました。
馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。
そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つていました。

篠田教授が去る。

坂口助手
大木さん
坂口助手

それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。
やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えよよかった
と、一郎はときどき思うのです。

遠くに、篠田教授が現れる。大木さんに向かって、手を振る。

篠田教授・坂口助手・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん
・温井さん・大木さん・大浦さんがカンテラを持ってやってくる。後から、菅野くんが
やってくる。

4

菅野くん あの、今度は何ですか？ カンテラなんて古臭いものを出してきて。
篠田教授 静かに。
菅野くん でも、皆さん、ちよつと不気味ですよ。遠くから見ると、まるでヒトダマ
前田さん みたいですよ。その光に誘われて、本物のヒトダマが来たりしたら……。
小川さん ヒトダマよりもつと怖いのが来るかもね。
菅野くん わあ、楽しみ。
坂口助手 僕は全然楽しみじゃない。幽霊とか妖怪とか、大嫌いなんです。すぐに授
坂口助手 業を再開しましょう。
菅野くん あなた、また誤解してるみたいね。
菅野くん 誤解って？
菅野くん 今は休憩時間じゃない。私たちは、このカンテラでヒトダマごっこをする
坂口助手 るわけでもない。賢治島を探してるの。
菅野くん でも、どうしてカンテラなんですか？ 探し物をするなら、懐中電灯とか、
菅野くん もつと明るい光にすればいいのに。いや、それよりも、昼間探した方が。

岡田さん
それ以上、無駄口を叩いたら、トンカチで頭を叩いて、身長を半分にするわよ。

菅野くん
わかりましたよ。黙ればいいんでしょう、黙れば。全く訳がわからないよなあ。紙ヒコーキを飛ばしたり、カンテラを出したり――

岡田さん
菅野。

菅野くん
シーン。

諸君、カンテラの火を一つずつ吹き消していこう。

十一人がカンテラの火を吹き消していく。最後に、温井さんのカンテラの火が残る。

温井さん
『貝の火
ただしカンテラの火』

温井さんがカンテラの火を吹き消す。篠田教授・坂口助手・菅野くん・岡田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・大木さん・大浦さんが去る。温井さん・前田さんは残る。

前田さん
今は兎たちは、みんなみじかい茶色の着物です。野原の草はきらきら光り、あちこちの樺の木は白い花をつけました。子兎のホモイは、悦んでぴんぴん躍りながら申しました。

温井さん
「ふん、いい匂だなあ。うまいぞ、うまいぞ、鈴蘭なんかまるでパリパリだ」

前田さん
ホモイは、いつか小さな流れの岸まで来て居りました。すると不意に流れ

の上の方から、

そこへ、藤岡さんがやってくる。

藤岡さん
前田さん

「ブルルル、パイ、パイ、パイ、パイ」
とけたたましい声が出て、うす黒いもじやもじやした鳥のような形のも
が、ばたばたばたばたもがきながら、流れて参りました。流されるのは、
たしかに瘠せたひばりの子供です。ホモイはいきなり水の中に飛び込んで、
前あしでしっかりとそれを捉まえました。そして、

温井さん
前田さん

「大丈夫さ、大丈夫さ」
と云いながら、その子の顔を見ますと、ホモイはぎよつとして危なく手を
はなしそうになりました。それは顔中しわだらけで、くちばしが大きくて、
おまけにどこかとかげに似ているのです。けれどもこの強い兔の子は、決
してその手をはなしませんでした。そして力一杯にひばりの子を岸の柔ら
かな草の上に投げあげて、自分も一とびにはね上りました。
ひばりの子は草の上に倒れて、目を白くしてガタガタ顫えています。ホモ
イも疲れでよろよろしましたが、無理にこらえて、楊の白い花をむしって
来て、ひばりの子に被せてやりました。その時、空からヒュウと矢のよう
に降りて来たものがあります。

そこへ、菅野くんがやってくる。

前田さん

それは母親のひばりでした。母親のひばりは、物も言えずにぶるぶる顫え

ながら、子供のひばりを強く強く抱いてやりました。ホモイはもう大丈夫
と思つたので、一目散にお家へ走って帰りました。
お母さんは、ホモイを見てびつくりしました。

そこへ、小川さんがやってくる。菅野くん・藤岡さんは去る。

小川さん

「おや、どうかしたのかい。大変顔色が悪いよ」

温井さん

「ああ頭がぐるぐるする。お母さん。まわりが変に見えるよ」

前田さん

と云いながら、そのままバツタリ倒れてしまいました。ひどい熱病にかか
つたのです。

前田さんが去る。

小川さん

ホモイがおとうさんやおっかさんのおかげで、すっかりよくなったのは、
鈴蘭にみんな青い実ができた頃でした。ホモイは、或る晩、はじめてうち
から一寸出て見ました。すると不意に、空でブルルツとはねの音がして、
二疋の小鳥が降りて参りました。

そこへ、菅野くん・藤岡さんがやってくる。

菅野くん

「ホモイさま。あなたさまは私ども親子の大恩人でございます」

温井さん

「あなた方は先頃のひばりさんですか」

菅野くん

「さようでございます。先日はせがれの命をお助け下さいまして誠にあり

がとう存じます。これは私どもの王からの贈物でございます」

菅野くんがバッグを開けて、カンテラを取り出す。

小川さん

ひばりは赤い光るものをホモイの前に出して、薄いけむりのようなほんかちを解きました。それはとちの実位あるまんまるの玉で、中では赤い火がちらちら燃えているのです。

菅野くん

「これは貝の火という宝珠でございます。どうかお納めをねがいます」

温井さん

「僕はこのなみのいりませんよ。大変きれいなもんですから、見る丈で沢山です。見たくなったら又あなたの所へ行きましょう」

菅野くん

「いいえ、どうかお納めをねがいます。お納め下さらないと、又私はせがれと二人で切腹をしないとなりません。さ、せがれ。お暇をして。ご免下さいませ」

小川さん

そしてひばりの親子は二三遍お辞儀をしてあわてて飛んで行ってしまいました。

菅野くん・藤岡さんが去る。

小川さん

ホモイは玉を取りあげて見ました。玉は赤や黄の焰をあげてせわしく燃えているように見えますが、実はやはり冷たく美しく澄んでいるのです。目にあてて空にすかして見ると、もう焰は無く、天の川が奇麗にすきとおっています。目からはなすと又ちらりちらり美しい火が燃え出します。ホモイはそつと玉を捧げて、おうちへ入りました。そしてすぐお父さんに

見せました。

そこへ、前田さんがやってくる。

小川さん
前田さん

するとお父さんが玉を手にとつて、よく調べてから申しました。

「これは有名な貝の火という宝物だ。これは大変な玉だぞ。これをこのまま一生満足に持っている事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだという話だ。お前はよく気を付けて光をなくさないようにするんだぞ」

温井さん

「大丈夫だよ。僕なんかきつと立派にやるよ。玉は僕持つて寝るんだから下さい」

小川さん

ホモイはそれを胸にあててすぐねむってしまった。

そこへ、菅野くんがやってくる。

菅野くん

あくる朝、ホモイは七時頃目をさまして、まず第一に玉を見ました。玉の美しいことは、昨夜よりもつとです。ホモイは今まで兎の遠めがねを入れて置いた瑪瑙の箱にしまつてお母さんにあずけました。そして外に出ました。

前田さん・小川さんが去る。

菅野くん

風が吹いて草の露がバラバラとこぼれます。つりがねそうが朝の鐘を「カ

ン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」と鳴らしています。ホモイは
びよんびよん跳んでにわとこの木の陰に行きました。するとそこに若い栗
鼠が、白いお餅を食べて居りました。

そこへ、藤岡さんがやってくる。

菅野くん
温井さん
菅野くん

ホモイはいつものように、
「りすさん。お早う。りすさん。今日も一諸にどこか遊びに行きませんか」
と云いますと、りすは飛んでもないと云うように目をまん円にしていきな
り逃げて行つてしまいました。

藤岡さんが去る。小川さんがやってくる。

菅野くん
温井さん

ホモイは顔色を変えてうちへ戻つて来て、
「おつかさん。何だか変な工合ですよ。りすさんなんか、僕を仲間はずれ
にしましたよ」

小川さん

「それはそうですよ。お前はもう立派な人になったんだから、りすなんか
恥しいのです。」

温井さん
小川さん
温井さん

「そんなら僕はもう大将になつたんですか」
「まあそうです」

小川さん

「うまいぞ。うまいぞ。もうみんな僕のでしたなんだ。狐なんかもうこわ
くも何ともないや。おつかさん。僕ね、りすさんを小将にするよ」
「そうだね、けれどもあんまりいばるんじゃないやありませんよ」

温井さん
菅野くん

「大丈夫ですよ。僕一寸外へ行つて来ます」
と野原へ飛び出しました。するとすぐ目の前を意地悪の狐が風のように走
つて行きます。

そこへ、中村さんがやってくる。

菅野くん

ホモイはぶるぶる顫えながら思い切つて叫んで見ました。

温井さん

「待て。狐。僕は大将だぞ」

中村さん

「へい。存じて居ります。何かご用でございますか」

温井さん

「お前はずいぶん僕をいじめたな。今度は僕のけらいだぞ」

中村さん

「へいお申し訳けもございません。どうかお赦しをねがいます」

温井さん

「特別に許してやろう。お前を少尉にする。よく働いて呉れ」

中村さん

「へいへい。ありがとうございます。どんな事でもいたします。少しとうも

温井さん

ろこしを盗んで参りましょうか」

中村さん

「いや、それは悪いことだ。そんなことをしてはならん」

温井さん

「へいへい。これからは決していたしません。何でもおいつけを待つて

菅野くん

いたします」
「そうだ。用があつたら呼ぶからあっちへ行つておいで」
狐はくるくるまわつておじぎをして向うへ行つてしまいました。

菅野くんが去る。

中村さん

次の日ホモイは、お母さんに云いつけられて野原に出て、鈴蘭の実を集め

温井さん

中村さん

温井さん

ながらひとりごとを云いました。
「ふん、大将が鈴蘭の実を集めるなんておかしいや。誰かに見つけられたらきつと笑われるばかりだ。狐が来るといいがなあ」
すると足の下が何だかまくもくしました。見るとむぐらが土をくぐってだんだん向うへ行こうとします。
「むぐら、むぐら、むぐらもち、お前は僕の偉くなったことを知ってるかい」

そこへ、菅野くんがやってくる。

菅野くん

温井さん

菅野くん

温井さん

菅野くん

温井さん

中村さん

「ホモイさんでいらっしやいますか。よく存じて居ります」
「そうか。そんならいいがね。僕、お前を軍曹にするよ。その代り少し働いて呉れないかい」
「へいどんなことでございますか」
「鈴蘭の実を集めておくれ」
「さあ誠に恐れ入りますが私は明るい所の仕事は一向無調法でございます」
「そうかい。そんならいいよ。頼まないからあとで見ておいで。ひどいよ」
「どうかご免をねがいます。私は長くお日様を見ますと死んでしまいますので」
「もういいよ。だまっておいで」
その時向うのにわとこの陰からりすがちよろちよろ出て参りました。そしてホモイの前にびよこびよこ頭を下げて申しました。

そこへ、藤岡さんがやってくる。菅野くんは去る。

藤岡さん 「ホモイさま、どうか私に鈴蘭の実をお採らせ下さいませ」

温井さん 「いいとも。さあやって呉れ。お前は僕の少将だよ」

中村さん りすがきやつきやつ悦んで仕事にかかりました。それから、夕方迄に鈴蘭

の実を沢山集めて、大騒ぎをしてホモイのうちへ運びました。おっかさんが、その騒ぎにびっくりして云いました。

そこへ、小川さんがやってくる。

小川さん 「おや、どうしたの、りすさん」

温井さん 「おっかさん。僕の腕前をござらん。まだまだ僕はどんな事でもできるんで

すよ」

中村さん すると丁度お父さんが戻って来て

そこへ、前田さんがやってくる。

前田さん 「ホモイ、お前は少し熱がありはしないか。むぐらを変おどしたそうだな。むぐらの家ではもうみんななきちがいのようになって泣いてるよ。それ

にこんなに沢山の実を全体誰がたべるのだ」

ホモイは泣きだしました。りすはしばらく気の毒そうに見て居りましたが

中村さん どうとうそこそこ逃げてしまいました。

藤岡さんが去る。

前田さん

「お前はもうだめだ。貝の火を見てごらん。きっと曇ってしまったているから」

中村さん

おつかさんまでが泣いて、前かけで涙をそっと拭いながらあの美しい玉のはいつた瑪瑙の函を戸棚から取り出しました。おとうさんは函を受けとつて蓋をひらいて驚きました。珠は一昨日の晩よりももつと赤くもつと速く燃えているのです。

そこへ、菅野くんがやってくる。前田さん・小川さんは去る。

菅野くん

中村さん

次の朝早くホモイは又野原に出ました。狐が一生けん命に走って来て、「ホモイさん。昨日りすに鈴蘭の実を集めさせたそうですね。今日は私がいいものを見附けて来てあげましょう。それは黄色でね、もくもくしてね、失敬ですが、ホモイさん、あなたなんかまだ見たこともないやつですぜ。それから、昨日むぐらに罰をかけると仰っしゃったそうですね。あいつは元来横着だから、川の中へでも追いこんでやりましょう」

温井さん

「むぐらは許しておやりよ。僕もう許したよ。けれどそのおいしいたべものは少しばかり持って来てごらん」

中村さん

「合点、合点。十分間だけお待ちなさい。十分間ですぜ」

菅野くん

と云つて狐はまるで風のように走って行きました。「むぐら、むぐら、むぐらもち。もうお前は許してあげるよ。泣かなくてもいいよ」

菅野くん 土の中はしんとして居りました。狐が又向うから走って来ました。そして、

中村さんがバッグを開けて、食パンを取り出す。

中村さん 「さあおあがりなさい。これは天国の天ぷらというもんですぜ」
菅野くん と云いながら盗んで来た角パンを出しました。ホモイは一寸たべて見たら、

実にどうもうまいのです。

温井さん 「こんなものの木に出来るのだい」

中村さん 「台所という木ですよ。おいしかったら毎日持って来てあげましょう」

温井さん 「それではきつと毎日持って来ておくれ」

中村さん 「へい。よろしうございます。その代り私の鶏をとるのを、あなたがとめ

てはいけませんよ」

温井さん 「いいとも」

中村さんが去る。前田さん・小川さんがやってくる。

菅野くん ホモイは急いでおうちに帰りました。

温井さん 「お父さん。いいものを持って来ましたよ。まあ一寸たべてごらんなさい」

菅野くん と云いながら角パンを出しました。お父さんはそれを受けとって、よくよ

く調べてから云いました。

前田さん 「お前はこんなものを狐にもらったな。これは盗んで来たもんだ。こんな

ものをおれは食べない」

菅野くん ホモイはわっと泣きだしました。お母さんも一諸に泣きました。

前田さん

「ホモイ、お前はもう駄目だ。玉を見てごらん。もうきつと砕けているから」

菅野くん

お母さんが泣きながら函を出しました。玉はお日さまの光を受けてまるで天上に昇って行きそうに美しく燃えました。

菅野くん・前田さん・小川さんが去る。藤岡さん・中村さんがやってくる。

藤岡さん

次の日ホモイは又野原に出ました。狐が走って来てすぐ角パンを渡しました。

中村さん

「ホモイさん。何か面白いことをしようじゃありませんか」

温井さん

「むぐらを罰にするのはどうです。あいつは実にこの野原の毒むしですぜ。今日は私だけでむぐらをいじめますからあなたはだまって見ておいでなさい。いいでしょう」

温井さん

「うん。毒むしなら少しいじめてもよからう」

藤岡さん

狐は、しばらくあちこち地面を嗅いだり、とんとんふんでみたりしていましたが、とうとう一つの大きな石を起しました。するとその下にむぐらがぶるぶるふるえて居りました。

そこへ、菅野くんがやってくる。

中村さん

「さあ、走れ、走らないと、噛み殺すぞ」

菅野くん

「ごめん下さい、ごめん下さい。」

藤岡さん

と云いながら逃げようとするのですが目が見えないからただ草を掻くだけです。ホモイも思わず

温井さん

「シッシッ」
と云つて足を鳴らしました。その時、

藤岡さん

そこへ、前田さんがやってくる。

前田さん

「こらっ何をする」

藤岡さん

と云う大きな声がして、狐がくるくる四遍ばかりまわつてやがて一目散に逃げました。見るとホモイのお父さんが来ているのです。お父さんは、急いでむぐらを穴に入れてやって、それからホモイの首すじをつかんで、ぐんぐんおうちへ引いて行きました。

中村さん・菅野くんが去る。小川さんがやってくる。

藤岡さん

おっかさんが出て来て泣いておとうさんにすがりました。

前田さん
藤岡さん

「ホモイ。お前はもう駄目だぞ。今日こそ貝の火は砕けたぞ。出して見ろ」
お母さんが涙をふきながら函を出して来ました。お父さんは函の蓋を開いて見ました。するとお父さんはびっくりしてしまいました。貝の火が今日位美しいことはまだありませんでした。

温井さん

「お母さん。僕はね、うまれつきあの貝の火と離れないようになってるんですよ。たとえ僕がどんな事をしたってあの貝の火がどこかへ飛んで行くなんてそんな事があるもんですか」

前田さん 「実際そうだといいがな」

藤岡さん・前田さんが去る。中村さんがやってくる。

小川さん 次の朝ホモイは又野に出ました。狐が角パンを持ってやって来ました。
中村さん 「ホモイさん。今日は一つうんと面白いことをやりましょう。動物園をあ

なたは嫌いですか」

温井さん 「うん。嫌いではない」

小川さん 狐が懐から小さな網を出しました。そして、

中村さん 「そら、こいつをかけて置くと雀でもかけすでも、もつと大きなやつでも

ひっかかりませぬ。それを集めて動物園をやるうじやありませんか」

温井さん 「やろう。けれども、その網でとれるかい」

中村さん 「大丈夫ですとも。あなたは早くパンを置いておいでなさい。そのうちに

私はもう百位は集めて置きますから」

小川さん ホモイは、急いで角パンを取ってお家に帰って、台所の棚の上に載せて、

又急いで帰って来ました。

そこへ、前田さん・藤岡さんがやってくる。小川さんは去る。

前田さん 見るともう狐は霧の中の樺の木に、すっかり網をかけて、口を大きくあけて笑っていました。

中村さん 「はははは、ご覧なさい。もう四疋つかまりましたよ」

前田さん 狐はどこから持って来たか大きな硝子箱を指さして云いました。その中に

藤岡さん

はかけすと鶯と紅雀とひわと四疋入ってばたばたして居りました。けれどもホモイの顔を見ると、みんな急に安心したように静まりました。

「ホモイさん。どうかあなたのお力で助けてやって下さい。私は狐にかまつたのです。あしたはきつと食われます。お願いでございます。ホモイさん」

前田さん

ホモイはすぐ箱を開こうとしました。すると、狐が額に黒い皺をよせて、眼を釣り上げてどなりました。

中村さん
前田さん

「ホモイ。気をつけろ。その箱に手でもかけて見ろ。食い殺すぞ。泥棒め」
ホモイは怖くなってしまうと、一目散におうちへ帰りました。

前田さん・藤岡さんが去る。

中村さん

夜中にホモイは眼をさました。そしてこわごわ起きあがってそつと枕もとの貝の火を見ました。貝の火は、魚の眼玉のように銀色に光っています。もう赤い火は燃えていませんでした。ホモイは大声で泣き出しました。

そこへ、前田さん・小川さんがやってくる。

中村さん

お父さんやお母さんがびっくりして起きてあかりをつけました。ホモイは泣きながら狐の網のはなしをお父さんにしました。

前田さん

「ホモイ。お前は馬鹿だぞ。俺も馬鹿だった。お前はひばりの子供の命を助けてあの玉を貰ったのじゃないか。それをお前は一昨日なんか生れつきだなんて云っていた。さあ野原へ行こう。狐がまだ網を張って居るかもしれない」

中村さん

れない。お前はいのちがけで狐とたたかうんだぞ。勿論おれも手伝う」
ホモイは泣いて立ちあがりました。お母さんも泣いて二人の後を追いました。

そこへ、藤岡さんがやってくる。

藤岡さん

狐はまだ網をかけて、樺の木の下に居ました。そして三人を見て口を曲げて大声でわらいました。

前田さん

「狐。お前はよくもホモイをだましたな。さあ決闘をしろ」

中村さん

「へん。貴様ら三疋ばかり食い殺してやつてもいいが、俺もけがでもする
とつまらないや。おれはもつといい食べものがあるんだ」

藤岡さん

そして函をかついで逃げ出そうとしました。

前田さん

「待てこら」

藤岡さん

とホモイのお父さんがガラスの箱を押えたので狐はよろよろしてとうとう
函を置いたまま逃げ去ってしまいました。

そこへ、菅野くんがやってくる。藤岡さんは去る。

菅野くん

見ると箱の中に鳥が百疋ばかり、みんな泣いていました。雀やかけすやう
ぐいすは勿論、大きな大きな鼻や、それにひばりの親子までがはいっている
のです。ホモイのお父さんは蓋をあけました。鳥がみんな飛び出して地面
に手をつけて云いました。

そこへ、藤岡さんがやってくる。

藤岡さん

前田さん

藤岡さん

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

そこへ、中村さんがやってくる。

五人

前田さん

中村さん

藤岡さん

菅野くん

小川さん

前田さん

中村さん

「ありがとうございます。ほんとうに度々おかげ様でございます」

「どう致しまして、私共は面目次第もございません。あなた方の王さまからいただいた玉をとろうと曇らしてしまつたのです」

「まあどうしたのでしょうか。どうか一寸拝見いたしたいものです」

「さあどうぞ」

お父さんはみんなをおうちの方へ案内しました。ただの白い石になつてしまつた貝の火を取りあげて、

「もうこんな工合です。どうか沢山笑つてやつて下さい」

と云うとたん、貝の火は鋭くカチツと鳴つて二つに割れました。

と思うと、パチパチパチツと烈しい音がして見る見るまるで煙のように砕けました。

ホモイが入口でアツと云つて倒れました。

目にその粉が入つたのです。

みんなは驚いてそつちへ行こうとしますと

今度はピチピチピチと音がして煙がだんだん集まり、

やがて立派ないくつかのかけらになり、

おしまいにカタツと二つかけらが組み合つて、

すつかり昔の貝の火になりました。

藤岡さん
菅野くん
小川さん

玉はまるで噴火のように燃え、
夕日のようにかがやき、
ヒューと音を立てて窓から外の方へ飛んで行きました。

中村さん・藤岡さんが去る。

前田さん

鳥は一人去り二人去り今はふくろうだけにになりました。ふくろうはじろじ

菅野くん

ろ室の中を見まわしながら
「たった六日だったな。ホッホ

前田さん

とあざ笑って肩をゆすぶって大股に出て行きました。

菅野くんが去る。

小川さん

それにホモイの目は、もうさっきの玉のように白く濁ってしまつて、まっ

前田さん

たく物が見えなくなつたのです。

前田さん

お母さんは泣いてばかり居ました。

小川さん

お父さんがホモイのせなかを静かに叩いて云いました。
「泣くな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかつたお前は、
一番さいわいなのだ。目はきつと又よくなる。お父さんがよくしてやるか

小川さん
前田さん

ら。な。泣くな」
窓の外では霧が晴れて鈴蘭の葉がきらきら光り、つりがねそうは、
「カン、カン、カンカエコカンコカンコカン」

小川さん

と朝の鐘を高く鳴らしました。

篠田教授・坂口助手・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん
・温井さん・大木さん・大浦さんがやってくる。舞台の隅に転がっていたリング箱を、
中央に並べる。みんなが去ろうとする。が、立ち止まり、振り返る。青山さんが一人で
リング箱に座っている。

大木さん
十人

『無口な
風の又三郎』

① 篠田教授・坂口助手・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・温井さんが去る。
大木さん・大浦さん・岡田さんがやってくる。三人が青山さんに気づく。青山さんが座
っているのは、大木さんの席だった。大木さんが青山さんに怒鳴る。青山さんは無視す
る。大木さんがさらに怒鳴る。大浦さん・岡田さんが大木さんを止める。
そこへ、篠田教授・坂口助手・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・温井さんが
やってくる。温井さんが大木さんに、なぜ怒鳴っているのか、聞く。岡田さんが説明す
る。温井さんが、きつと転校生だ、と言う。大木さんが青山さんに、怒鳴ったことを謝
る。青山さんは無視する。大木さんがまた怒鳴る。みんなが大木さんを止める。
その時、風が吹く。大浦さんが、青山さんがいなくなつた、と言う。みんなが振り返る
と、青山さんの姿はない。岡田さんが、風の又三郎だ、と言う。みんなが笑う。

そこへ、菅野くんがやってくる。みんなに、席につけ、と言う。菅野くんは担任の先生だった。みんながリング箱に座る。菅野くんが、転校生が来た、と言う。奥に向かつて、入っておいで、と言う。入ってきたのは、青山さんだった。菅野くんがみんなに青山さんを紹介する。岡田さんが菅野くん、青山さんの名前を聞く。菅野くんが、高田三郎くんです、と答える。岡田さんが、やっぱり風の又三郎だ、と叫ぶ。

篠田教授・坂口助手・菅野くん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さんが去る。

② 大木さん・大浦さんが捕虫網を、岡田さんが虫かごを持ってやってくる。大木さんがトンボを捕まえようとして、失敗する。大浦さんは成功する。大木さんが悔しがる。

その時、風が吹く。三人が振り返ると、青山さんが立っている。スケッチブックと鉛筆を持って、行こうとする。岡田さんが青山さんに、一緒にトンボを捕ろう、と言う。青山さんが無視して、行こうとする。岡田さんが青山さんの肩をつかむ。青山さんがその手を振り払う。岡田さんが怒る。大浦さんが岡田さんを止める。

大木さんが岡田さんに、そんなやつ放っておいて、トンボを捕ろう、と言う。そこへ、トンボが飛んでくる。大木さんが捕まえようとして、失敗する。それを見て、青山さんが笑う。大木さんが青山さんに、捕虫網を突き出す。青山さんは受け取らずに、鉛筆を立てる。鉛筆の先に、トンボが止まる。青山さんがトンボを捕まえ、岡田さんに差し出す。岡田さんが受け取って、虫かごに入れる。青山さんが笑いながら去る。大木さんが悔しがる。

③ 篠田教授・坂口助手・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・温井さん・大木さん・大浦さんが木の枝を持ってやってくる。二人一組になって、チャンバラを始める。

そこへ、菅野くんが木の枝を持ってやってくる。みんなに、先生も仲間に入れてくれ、

が笑いながら去る。大木さんが周囲を見回す。青山さんの姿はない。大木さんが青山さんを探す。

その時、風が吹く。大木さんが振り返ると、青山さんが立っている。青山さんは巨大なマントを着ている。そこへ、坂口助手・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・温井さん・大浦さんがやってくる。みんながマントの端をつかむ。マントが広がる。青山さんが空へ舞い上がる。実はマントの中で、篠田教授と菅野くんが担ぎ上げたのだ。

⑥ マントが大きく翻る。篠田教授・坂口助手・菅野くん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大浦さんが去る。大木さんが気を失って、倒れる。

大浦さんがやってくる。二人が大木さんを起こす。そこへ、篠田教授・坂口助手・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・温井さんがやってくる。舞台の隅に転がっていたリングゴ箱を、中央に並べる。

そこへ、菅野くんがやってくる。みんなに、席につけ、と言う。みんながリングゴ箱に座る。温井さんが菅野くんに、高田くんは休みですか、と聞く。菅野くんは、高田くんは転校しました、と言う。岡田さんが、あいつはやっぱり風の又三郎のだったんだ、と言う。

その時、風が吹く。みんなが窓の外の空を見上げる。大木さんが泣き出す。

青山さんがトランクを持ってやってくる。トランクを中央に置き、開く。篠田教授・坂口助手・菅野くん・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さん・大浦さんがリコーダーを取り出す。そこへ、菅野くんがやってくる。

菅野くん

へえ、懐かしいなあ。リコーダーか。

篠田教授

君も一本取りなさい。

菅野くん

いいんですか？ 僕、リコーダーは得意だったんですよ。『ボギー大佐』

坂口助手

ならば、今でもすぐに吹けます。

菅野くん

それは、休憩時間にしてちょうだい。

坂口助手

ということは、これもやっぱり授業の一部なんですか？

菅野くん

そういうこと。

岡田さん

あの、このゼミの研究テーマは宮沢賢治ですよ？ 賢治とリコーダーは

篠田教授

何の関係もないと思いますけど。

菅野くん

ところが、関係あるのよね。

篠田教授

ベートーベン作曲、交響曲第六番「田園」、始め。

十二人がリコーダーを吹く。曲が盛り上がってきたところで、青山さんが手を叩く。み

んなが吹くのを止める。

青山さん

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ」
「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてま
でいるひまはないんだがなあ。今の前の小節から。はいっ」
「だめだ。まるでなっていない」

篠田教授・坂口助手・菅野くん・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん
・温井さん・大木さん・大浦さんが去る。

青山さん

「ゴーシユ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもびたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで」

そこへ、坂口助手・前田さんがやってくる。

前田さん

『セロ弾きのゴーシュ』

坂口助手

『ゴーシユ弾かれのセロ』

青山さん

その晩遅くゴーシユは何か巨きな黒いものをしよってじぶんの家へ帰って

坂口助手

前田さん
坂口助手

そこへ、中村さんがやってくる。青山さんは去る。

坂口助手

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬はひどいやな」

「何だと」

「これおみやです。たべてください」

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのも

きました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるとさっきの黒い包みをあけました。それは何でもありません。セロでした。ゴーシュは頭を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えは弾きしまいまで行くとまたはじめからごうごうごうごう弾きつづけました。夜中もとうにすぎてもうじぶんが弾いているのかもわからないようになっていまでも倒れるかと思うように見えませんでした。

「ホーシュ君か」

ゴーシュはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

中村さん
つてきたものなど食うか」
「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから」

前田さん
「生意気なことを云うな。ねこのくせに」

中村さん
「いやご遠慮はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです」

前田さん
「生意気だ。生意気だ。生意気だ」

坂口助手
ゴ―シュは足ぶみしてどなりましたがにわかに関を変えて云いました。

前田さん
「何をひけと」

中村さん
「トロメライ、ロマチックシューマン作曲」

前田さん
「そうか。トロメライというのはこういうのか」

前田さんがセロを弾く。坂口助手が『印度の虎狩り』を歌う。途中から、前田さんも歌う。

中村さん
「先生もうたくさんです。ご生ですからやめてください」

前田さん
「だまれ。これから虎をつかまえる所だ」

坂口助手・前田さんが歌う。中村さんが倒れる。坂口助手・前田さんが歌を止める。

前田さん
「さあこれで許してやるぞ」

中村さん
「先生、こんやの演奏はどうかしてますね」

坂口助手
セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一

前田さん

中村さん

前田さん

坂口助手

本だして口にくわいそれからマツチを一本とって

「どうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん」

(舌を出す)

「ははあ、すこし荒れたね」

セロ弾きはいきなりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけま

した。さあ猫は愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入口の扉

へ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻って来てどんと

ぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱のなかを走って行くのを見てちよ

つとわらいました。それから、やつとせいせいしたというようにぐっすり

ねむりました。

そこへ、青山さんがやってくる。中村さんは去る。

青山さん

坂口助手

次の晩もゴーシュがまたセロをかついで帰ってきました。そしてゆうべの

とおりがんぐんセロを弾きはじめました。

それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやって

いますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか」

ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰い

ろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかっこうでした。

前田さん

坂口助手

そこへ、小川さんがやってくる。青山さんは去る。

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

前田さん

小川さん

前田さん

「鳥まで来るなんて。何の用だ」

「音楽を教わりたいのです」

「音楽だと。おまえの歌はかつこう、かつこうというだけじゃあないか」

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ」

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、な

きようは何でもないじゃないか」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかっこ

うとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうでしょう」

「ちがわないね」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一

万云えば一万みんなちがうんです」

「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの処へ来なくてもいいでは

ないか」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです」

「ドレミファもくそもあるか」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです」

「外国もくそもあるか」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますか

ら」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るん

だぞ」

前田さんがゼロを弾く。坂口助手が「かつこうかつこう」と言う。小川さんも「かつこうかつこう」と鳴く。何度も何度も。

前田さん
小川さん
「こら、いいかげんにしないか。もう用が済んだらかえれ」
「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです」

前田さん
「何だと、おれがきさまに教わってるんではないんだぞ」

小川さん
「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか」

前田さん
「ではこれつきりだよ」

小川さん
「ではなるべく永く永くおねがいたします」

前田さん
「いやになっちまうなあ」

前田さんがゼロを弾く。坂口助手が「かつこうかつこう」と言う。小川さんも「かつこうかつこう」と鳴く。何度も何度も。

坂口助手
ゴ―シュはじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミアにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのです。

前田さん
「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になっちゃおう」

前田さんが弾くのを止める。坂口助手が口を閉じる。

小川さん

前田さん

小川さん
前田さん

坂口助手

前田さん
坂口助手

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意地ないやつでもものどから血が出るまでは叫ぶんですよ」

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか」

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですから」

「黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまっぞ」

するとかっこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶっつけてばたつと下へ落ちました。見ると嘴のつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っていろつたら」

ドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をばつとけりました。ガラスは二枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまうました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡ってしまいました。

そこへ、青山さんがやってくる。小川さんは去る。

青山さん

坂口助手

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいまずと、また扉をこつこつと叩くものがあります。今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追い払ってやろうと思つて待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸の子がはいつてきました。

そこへ、○○さん（日替わりキャスト）がやってくる。青山さんは去る。

○○さんは、狸の子ではなく、別の動物だと名乗る。そして、坂口助手・前田さんに、音楽の神髄を教える。○○さんに許された時間は、わずか五分。五分経ったら、坂口助手・前田さんは、たとえ話の途中でも、○○さんを外へ追い出す。

坂口助手

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてる風を吸っていました。町へ出て行くまで睡つて元気をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

そこへ、青山さんがやってくる。

青山さん

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近くつかれてうとうとしていまずとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。ゴーシュはすぐ聞きつけて

坂口助手
前田さん
坂口助手

「おはいり」
と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。

そこへ、岡田さん・大浦さんがやってくる。

坂口助手

そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。

岡田さん

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやってくださいまし」

前田さん

「おれが医者などやれるもんか」

岡田さん

「先生、それはうそでございます。先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか」

前田さん

「何のことだかわからんね。」

岡田さん

「だって先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんなに情ないことでございます」

前田さん

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんとなおしてやったことはいからな」

岡田さん

「ああこの児はどうせ病気になるならもつと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしよにびたつと音がとまってもうあとはいくらおねがいても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう」

前田さん

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは」

岡田さん

「はい、ここらのものは病気になるるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます」

前田さん

「すると療るのか」

岡田さん

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐに療る方もあればうちへ帰ってから療る方もあります」

前田さん

「そうか。よし。わかったよ。やってやろう」

坂口助手

ゴーシュはいきなりのねずみのこどもをつまんでゼロの孔から中へ入れてしまいましたが。おっかさんの野ねずみはきちがいのようになってゼロに飛びつきました。

岡田さん

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい」

大浦さん

「いい。うまく落ちた」

前田さん

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ」

坂口助手

ゴーシュはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとってごうごうがあがあ弾きました。

前田さんがゼロを弾く。坂口助手が『元気になれ』を歌う。途中から、前田さんも歌う。

岡田さん

「もう沢山です。どうか出してやってください」

前田さん

「なあんだ、これでいいのか」

坂口助手

ゴーシュはゼロをまげて孔のところを手にあてて待っていましたたら間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシュは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるぶるふるふるえていま

岡田さん
大浦さん

岡田さん

前田さん

岡田さん

前田さん

坂口助手

した。
「どうだったの。いいかい。気分は」
（走り出す）
「ああよくなっただ。ありがとうございます。ありがとうございます」
「おい、おまえたちはパンはたべるのか」
「いえ、もうおパンというものはおいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚へなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びに难道参れましよう」
「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちよつと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな」
「ゴ―シュは戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。野ねずみはもうまるでほかのようになつて泣いたり笑ったりおじぎをしましたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。ゴ―シュはねどこへどっかかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。」

そこへ、青山さんがやってくる。岡田さん・大浦さんは去る。

青山さん
坂口助手

それから六日目の晩でした。
金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの控室へみんなぱつと顔をほてらして舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴って居ります。大きな白いり

青山さん

「ボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。」
「アンコールをやっていきますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか」
「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです」

坂口助手

「では楽長さん出て一寸挨拶して下さい」

青山さん

「だめだ。おい、ゴーシユ君、何か出て弾いてやってくれ」

前田さん

「わたしがですか」

青山さん

「君だ、君だ。さあ出て行きたまえ」

坂口助手

楽長がセロをむりにゴーシユに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴーシユを押し出してしまいました。ゴーシユが舞台へ出るとみんなはそれを見ろというように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

前田さん

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから」

坂口助手

ゴーシユはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

前田さんがセロを弾く。坂口助手が『印度の虎狩り』を歌う。そこへ、中村さん・小川さん・岡田さん・大浦さんがやってくる。

四人

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。

中村さん

ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。

小川さん
岡田さん
大浦さん

ゴーシュはどんどん弾きました。
猫が切ながってばちばち火花を出したところも過ぎました。
扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

前田さんが弾くのを止める。坂口助手が口を閉じる。

坂口助手

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようすばやくセロをもつて楽屋へ遁げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあのようなように眼をじっとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつさとするいて行つて向うの長椅子へどっかかりとからだをおろして足を組んですわりました。ところが楽長は立つて云いました。

青山さん

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君」
仲間もみんな立つて来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いました。
「いや、からだは丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな」

坂口助手
青山さん

青山さん・中村さん・小川さん・岡田さん・大浦さんが去る。

坂口助手

その晩遅くゴーシュは自分のうちへ帰つて来ました。それから窓をあけて

前田さん

「いつかかっこうの飛んで行ったと思っただ遠くのそらをながめながら、
「ああかっこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒ったんじゃなか
つたんだ」

篠田教授・坂口助手・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん
 ・温井さん・大木さん・大浦さんがまわりをつきながらやってくる。後から、菅野くんが
 まりを持ってやってくる。

菅野くん

あの、このまりつきも、もちろん、授業の一部なんですよね？

篠田教授

わかってているなら、聞くな。

菅野くん

でも、宮沢賢治の作品の中に、まりが出てきたのがあったかな。

坂口助手

甘いわね、菅野くん。これはまりに見えるかもしれないけど、まりじやないの。星なのよ。

菅野くん

星？

暗くなる。まりが光る。それはまるで星。星が飛ぶ。星が揺れる。星が走る。篠田教授
 ・坂口助手・中村さん・藤岡さん・温井さんが去る。明るくなる。菅野くん・前田さん
 ・小川さん・青山さん・大木さん・大浦さんがリングボックスに座っている。

岡田さん

「ではみなさんは、そういうふうな川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりして、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」

前田さん・小川さん・青山さん・大木さん・大浦さんが手を挙げる。

岡田さん 「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」

菅野くん 「立ち上がるが、答えない」

岡田さん 「大きな望遠鏡で銀河をよっく調べると銀河は大体何でしょう」

菅野くん 「答えない」

岡田さん 「ではカムパネルラさん」

小川さん 「立ち上がるが、答えない」

岡田さん 「では。よし。このぼんやりと白い銀河を大きい望遠鏡で見ますと、

もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

菅野くん 「うなずく」

岡田さん 「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一

つの小さな星はみんな川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光がある

速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。

つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。これが今日の

銀河の説なのです。今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へで

てよくそらをごらん下さい。ではここまでです」

前田さん・青山さん・大木さん・大浦さんが立ち上がる。

七人

『光速銀河鉄道の夜』

岡田さん・前田さん・小川さん・青山さんが去る。坂口助手・温井さんがやってくる。

大木さん

ジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。家へは帰らず町を三つ曲って大きな活版処の大きな扉をあけました。ジョバンニは入口から三番目の卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人は、

温井さん

「これだけ拾って行けるかね」

大木さん

と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから平たい函をとりだして隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

坂口助手

「よう、虫めがね君、お早う」

大木さん

六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱を、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

坂口助手・大木さんが去る。藤岡さんがやってくる。

温井さん

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。

菅野くん

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの」

藤岡さん

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ」

菅野くん

「今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って」

藤岡さん

「お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

菅野くん

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか」

藤岡さん

「来なかつたろうかねえ」

菅野くん

「ぼく行つてとつて来よう」

藤岡さん

「あたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、ト

菅野くん

マトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ」

温井さん

「ではぼくたべよう」

菅野くん

ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといっしよにしばらくむしゃむしゃたべました。

藤岡さん

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ」

菅野くん

「どうしてそう思うの」

藤岡さん

「だつて今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ」

菅野くん

「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない」

藤岡さん

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした

菅野くん

筈がないんだ」

藤岡さん

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ」

菅野くん

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ」

藤岡さん

「おまえに悪口を云うの」

菅野くん

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみ

菅野くん

「んながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一諸なら心配はないから」

「では一時間半で帰ってくるよ」

温井さんが去る。

藤岡さん

「ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜のまつ黒に
ならんだ町の坂を下りて来たのでした。坂の下に大きな街燈が、青白く立
派に光って立っていました。ジョバンニがその街燈の下を通り過ぎたとき、
いきなりザネリが、暗い小路から出て来て、ひらっとすれちがいました。

そこへ、前田さんがやってくる。

菅野くん

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの」

前田さん

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ」

藤岡さん

「ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこから中きいんと鳴るように思
いました。」

菅野くん

「何だい。ザネリ」

藤岡さん

と高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいっ

ていました。ジョバンニは、また深く首を垂れて、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

藤岡さんが去る。

前田さん

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。牛乳屋の黒い門に入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、

菅野くん
前田さん

「今晚は、ごめんさい」
すると、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来ました。

そこへ、中村さんがやってくる。

菅野くん

「あの、今日、牛乳が僕んところへ来なかつたので、貰いにあがつたんです」

中村さん

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい」

菅野くん

「おつかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです」

中村さん

「ではもう少したつてから来て下さい」

菅野くん

「そうですか。ではありがとう」

前田さん

ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

そこへ、小川さん・青山さん・大木さん・大浦さんがやってくる。

中村さん

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、雑貨店の前で六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、やって来るのを見ました。ジョバンニは思わずどきつきとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

前田さん

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」

四人
中村さん

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」
「ジョバンニはまっ赤になって、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、ジョバンニの方を見ていました。ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、黒い丘の方へ急ぎました。」

前田さん・小川さん・中村さん・青山さん・大木さんが去る。

大浦さん

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどのぼって行きました。林を越えると、俄かにならんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。ジョバンニは、天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

菅野くん
大浦さん

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。
ところがいくら見ても、そのそらは先生の云ったような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。見れば見るほど、小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかったのです。

そこへ、篠田教授・坂口助手・岡田さん・前田さん・小川さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さんがやってくる。

十一人

するとどこかで、

四人

銀河ステーション

三人

銀河ステーション

四人

銀河ステーション

十一人

と云う声があったと思うといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、ジヨバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

岡田さん

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。

前田さん

ジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。

中村さん

すぐ前の席に、子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きまし

篠田教授

た。その子供が頭を引っ込めて、こっちを見ました。それはカムパネルラだったのです。

十人

篠田教授・岡田さん・前田さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さん・大浦さんが去る。

小川さん

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」

菅野くん
小川さん

坂口助手

小川さん
坂口助手

菅野くん
坂口助手

小川さん

菅野くん

「どこかで待っていいよか」

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから」

カムパネルラは、円い板のようになつた地図を、見ていました。その中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。

「おや、あの河原は月夜だろうか」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろのすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」

ジョバンニは、まるではね上りたいくらい愉快になつて、窓から顔を出して、天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか」

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだろう」「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」

小川さん

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う」

坂口助手が去る。篠田教授がやってくる。

篠田教授

汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの一系列の電燈があらわれ、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

小川さん

「二十分停車」

篠田教授

と時計の下に書いてありました。

菅野くん

「ぼくたちも降りて見ようか」

小川さん

「降りよう」

篠田教授

二人は一度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。二人は、停車場の前の、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の中へ通っていました。その白い道を、肩をならべて行きますと、河原にきました。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしていました。

二人

「行ってみよう」

篠田教授

二人は、一度に叫んで、そっちの方へ走りしました。白い岩になった処の入口に、

菅野くん

「プリオン海岸」

篠田教授

という標札が立ってました。学者らしい人が、助手らしい人たちに夢中で

いろいろ指図をしていました。

そこへ、岡田さん・前田さん・青山さんがやってくる。

岡田さん

「そのその突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープをおっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ」

篠田教授

見ると、大きな青じろい獣の骨が、半分以上掘り出されていました。

岡田さん

「君たちは参観かね」

二人

(うなづく)

岡田さん

「ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。これはボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ」

菅野くん

「標本にするんですか」

岡田さん

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風や空に見えやしないかということなのだ。おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか」

小川さん

「もう時間だよ。行こう」

菅野くん

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします」

岡田さん

「そうですか。いや、さよなら」

篠田教授

二人は、白い岩の上を、一生けん命走りました。そして、もとの車室の席に座って、いま行って来た方を、窓から見ていました。

前田さん・青山さんが去る。中村さんがやってくる。

中村さん 「ここへかけてもようございますか」

菅野くん 「ええ」

中村さん 「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか」

菅野くん 「どこまでも行くんです」

中村さん 「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまででも行きますぜ」

小川さん 「あなたはどこへ行くんです」

中村さん 「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね」

菅野くん 「何鳥ですか」

中村さん 「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」

菅野くん 「どうしてとるんですか」

「そいつは、雑作ない。川原で待っていて、鷺が下りてくるとこを、地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。すると鷺は、かたまつて死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです」

菅野くん 「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」

中村さん 「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

小川さん 「おかしいねえ」

中村さん 「おかしいも不審もありませんや。そら。ごらんなさい。いまとつて来た

ばかりです」

二人 「ほんとうに鷺だねえ」

岡田さん

二人は思わず叫びました。まっ白に光る鷲のからだだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、浮彫のようにならんでいたのです。

小川さん

「鷲はおいしいんですか」

中村さん

「ええ、毎日注文があります。どうです、少しおあがりなさい」

篠田教授

「いや、商売ものを貰っちゃすみません」

中村さん

「いいえ、どういたしまして」

小川さん

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう」

岡田さん

鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

中村さん

「そうそう、ここで降りなけあ」

岡田さん

と云つたと思うと、もう見えなくなっていました。

小川さん

「どこへ行つたんだらう」

岡田さん

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑つて、横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、じつとそらを見ていたのです。

菅野くん

「あすこへ行つてる。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ」

岡田さん

と云つた途端、空から、鷲が、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっばいに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、鷲の黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、

中村さん

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな」

菅野くん

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか」

中村さん

岡田さん

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です」
窓の外の、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。

そこへ、藤岡さん・青山さんがやってくる。岡田さんは去る。

藤岡さん
青山さん

「切符を拝見いたします」
三人の席の横に、車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまって小さな紙きれを出しました。カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。何でも構わない、やっちなまえと思つて渡しましたら、
「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか」
「何だかわかりません」

菅野くん
藤岡さん

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります」

青山さん
中村さん

車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。
「こいつは大したもんですぜ。どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなたの方大したもんですね」

菅野くん
小川さん
青山さん

「何だかわかりません」
「もうじき鷺の停車場だよ」
カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云いました。

そこへ、温井さん・大浦さんがやってくる。青山さんは去る。

藤岡さん

そしたら俄かにそこに、六つばかりの男の子がたがたふるえてはだしで立っていました。隣りにはせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれています。やきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいていました。

大木さん
藤岡さん

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」
青年のうしろにも十二ばかりの可愛らしい女の子が不思議そうに窓の外を見ているのです。

温井さん

「ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されるのです」

藤岡さん

青年は男の子をジョバンニのとなり座に座らせました。それから女の子にカムパネルラのとりの席を指さしました。

大浦さん
温井さん

「ぼくおおねえさんのとこへ行くんだよう」
「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどもうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていていらっしやったでしょう。早く行ってお目にかかりましようね」

大浦さん

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかったなあ」

温井さん
篠田教授
温井さん

温井さん
篠田教授
温井さん

「ええ、けれど、ごらんなさい、あの立派な川、ね、きれいでしょ」

「あなた方はどちらからいらっしゃったのですか」

「氷山にぶつかって船が沈みましてね、ボートは左舷の方はもうだめになつてしまいましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそこからボートまでのところはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなか居て、とても押しつける勇氣がなかつたのです。子どもらばかりボートの中へはなしてやつてお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまっすぐに立っているなどもう腸もちぎれるようでした。私はすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。どこからともなく三〇六番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちました。この人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていたのです」

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから」

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう」

「おや、どっから来たのですか。立派ですなあ」

篠田教授

「いや、まあおとり下さい。さあ、坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい」

小川さん
菅野くん

「ありがとう」
「ありがとう」

そこへ、前田さんがやってくる。藤岡さんが去る。

前田さん

川の向う岸が俄かに赤くなりました。野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」

「蝸の火だな」

カムパネルラがまた地図と首つびきして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ」

「蝸って、虫だろう」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ」

「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬって先生が云ったよ」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかしのバルド

ラの野原に一びきの蝸がいたんですって。ある日いたちに見附かつて食べ

られそうになったんですって。さそりは一生存命遁げたけどとうとうい

たちに押えられそうになったわ、そのとき前に井戸があつてその中に落ち

大木さん

菅野くん

大木さん

菅野くん

前田さん

小川さん

菅野くん

大木さん

菅野くん

前田さん

てしまったわ、さそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云ってお祈りしたというの、
ああ、わたしはいままでいくつの命をとったかわからない、そして私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生存けん命にげた。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたに呉れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。神さま。どうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。ほんとうにあの火それだわ”
ジョバンニは三つの三角標がさそりの腕のように五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

そこへ、岡田さんがやってくる。前田さんは去る。

温井さん

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい」

大浦さん

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ」

温井さん

「ここでおりなけいけないのです」

大浦さん

「厭だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい」

菅野くん

「僕たちと一諸に乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符持っているんだ」

大木さん

「だけどあたしたちもうここで降りなけいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

菅野くん
大木さん

「天上へなんか行かなくなっちゃっていいじゃないか」
「だっておっ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ」

菅野くん

「そんな神さまうその神さまだい」

温井さん

「あなたの神さまってどんな神さまですか」

菅野くん

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもほんとうのたった一人の神さまです」

温井さん

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」

菅野くん

「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです」

温井さん

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなたの方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります」

岡田さん

ああそのときでした。見えない天の川の川の下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架が川の中から立ってかがやきその上には青

じろい雲がまるい環になって后光のようにかかっているのでした。

そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかに

なりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ」

青年は男の子の手をひき向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」

女の子が二人に云いました。

「さよなら」

ジョバンニは泣き出したいのをこらえてぶつきり棒に云いました。女の子

岡田さん

はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえってそれからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中は俄かにはらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。けれどもそのときはもう汽車はうごき出しと思いうちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。

大木さん・大浦さん・岡田さんが去る。

菅野くん

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一諸に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百ペン灼いてもかまわない」

小川さん

「うん。僕だつてそうだ」

菅野くん

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう」

小川さん

「僕わからない」

菅野くん

「僕たちしつかりやろうねえ」

小川さん

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」

温井さん

カムパネルラが天の川のひととを指さしました。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらは

な孔がどおんとあいているのです。

菅野くん

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きっとみんなのほんとう

のさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行く

小川さん

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな

温井さん

菅野くん

そこへ、篠田教授・坂口助手・岡田さん・前田さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・大木さん・大浦さんがやってくる。小川さんは去る。

十人

前田さん

藤岡さん

中村さん

坂口助手

温井さん

大浦さん

青山さん

坂口助手

集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ」

カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。「カムパネルラ、僕たち一諸に行こうねえ」

ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらもうカムパネルラの形は見えずジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。

そして窓の外へからだを乗り出して力いっばいはげしく叫び

それから咽喉いっばい泣きだしました。

もうそこから一ぺんにまっくらになつたように思いました。

「おまえはいったい何を泣いているの」

やさしいセロのような声が、ジョバンニのうしろから聞こえました。

ジョバンニは、はつと思つて涙をはらつてそつちを振り向きました。

さつきまでカムパネルラの座っていた席に黒い帽子をかぶつた大人が、やさしくわらつていました。

「おまえのともだちがどこかへ行ったのだらう。あのひとはね、ほんとうにこんや遠くへ行つたのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ」

菅野くん

坂口助手

「どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行こうと言ったんです」

菅野くん
坂口助手

篠田教授
菅野くん

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、苹果を食べたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやつぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、早くそこに行くがいい。そこでおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ」

「ぼくきつとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたいでしょう」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえは化学をならつたろう、水は酸素と水素からできている。いまはたれだってそれを疑いやしない。実験してみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔は水銀と塩でできていると言ったり、水銀と硫黄でできていると言ったりいろいろ議論したのだ。みんながめいめいじぶんの神さまがほんとうの神さまだというだろう、けれどもほかの神さまを信ずる人たちのしたことも涙がこぼれるだろう、それからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれども、もしおまえがほんとうに勉強して実験でほんとうの考えと、うその考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、もう信仰も化学と同じようになる。ああごらん、あすこにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖を解かなければならない」

そのときまっくらな地平線の向こうから青じろいのろしがうちあげられ、汽車の中はすっかり明るくなりました。

「ああマジエラン星雲だ。さあ僕は僕のために、僕のお母さんのために、

岡田さん
九人
坂口助手

カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」
ジョバンニは唇を噛んで、マジエラン星雲をのぞんで立ちました。
そのいちばん幸福なそのひとのために！
「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火や波の中を大股にまっすぐ歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない」

篠田教授・岡田さん・前田さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さん
・大浦さんが去る。

坂口助手

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。ほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。

菅野くん

「今晚は」

そこへ、中村さんがやってくる。

中村さん

「はい。何のご用ですか」

菅野くん 「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

中村さん 「あ済みませんでした」

坂口助手 その人はすぐ奥へ行つて一本の牛乳瓶をもつて来てジョバンニに渡しながらまた云いました。

中村さん 「今日はひるすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大將早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしまひましたね……」

菅野くん 「そうですか。ではいたゞいて行きます」

中村さん 「どうも済みませんでした」

坂口さんが去る。

中村さん

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。そしてしばらく行きますと町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいずつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。河原の水際に沿つてたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。するといきなりさつきカムパネルラといつしよだつたマルソに会いました。

そこへ、青山さんがやってくる。

青山さん 「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

菅野くん 「どうして、いつ」

青山さん

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」

菅野くん

「みんな探してるんだろう」

青山さん

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附か

中村さん

らないんだ」
ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。学生たち町の人たちに囲まれてカムパネルラのお父さんがまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

そこへ、小川さん・篠田教授がやってくる。中村さんは去る。

小川さん

みんなもじっと河を見ていました。川はばーぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えしました。ジョバンニはカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

篠田教授
小川さん

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

篠田教授

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう」

小川さん
篠田教授
菅野くん
篠田教授

小川さん

「ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。」
「あなたのお父さんはもう帰っていますか」
「いいえ。」
「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」
「そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにつつた方へじつと眼を送りました。ジョバンニはもういろいろいなことで胸がいつぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走り出した。」

篠田教授が去る。

菅野くん
二人

走りました。
走りました。

そこへ、篠田教授がやってくる。

篠田教授

どうやら、これで証明されたようだな。

菅野くん

何が？

篠田教授

決まってるだろう。東京都新宿区歌舞伎町一の十九の一、ここは間違いない賢治島だ。

そこへ、坂口助手・岡田さん・前田さん・中村さん・藤岡さん・青山さん・温井さん・大木さん・大浦さん・〇〇さん（日替わりキャスト）がやってくる。それぞれ、トラックやリュックを持っている。

坂口助手

篠田教授、おめでとうございます。

九人

おめでとうございます。

篠田教授

ありがとうございます。ありがとうございます、学生諸君。みんな、君たちの協力の

おかげだ。

坂口助手

これで、篠田教授が発見した賢治島の数は、四二七になりました。

篠田教授

そうか。じゃ、ここは、第四二七賢治島と命名しよう。

坂口助手

皆さん、お疲れさまでした。授業はこれで終わりです。この後、用事のな

岡田さん

小川さん

篠田教授

温井大木大浦

篠田教授

小川さん

菅野くん

坂口助手

菅野くん

坂口助手

菅野くん

坂口助手

菅野くん

坂口助手

菅野くん

い人は、打ち上げに行きましょう。

酒だ酒だ！

もちろん、篠田先生のおごりですよ？

待って待って。いくら何でも、この人数では――

篠田先生。(とお色気たっぷりに迫る)

ちよつとATMに寄り道してもいいかな？

やっつたー！

ちよつと待ってください。

何よ、菅野くん。

僕には全く理解できません。ここが賢治島だなんて、いつ証明されたんです。

たった今よ。

僕らはここで芝居をやった。ただそれだけじゃないですか。

そうね。でも、そのおかげで、わかったのよ。藤岡さんが拾った白銅は、

間違いない、『祭の晩』の白銅だった。大木さんが拾ったどんぐりは、間

違いなく、『どんぐりと山猫』のどんぐりだった。あなただって、そう思

ったでしょう？

思いませんでした。

じゃ、その苹果は？ ジョバンニの役をやっている時、それはあなたが家

から持ってきた苹果だった？

いいえ。あの時は確かに、燈台守がくれた苹果だと思いましたが、でも、そ

れはあくまでも芝居の中の話です。僕はジョバンニじゃないし、銀河鉄道にも乗ってない。

藤岡さん

座敷童？

青山さん

賢治の童話に出てくるでしょう？ 人がたくさん集まると、いつの間にか、

菅野くん

一人増えてるんです。でも、それが誰だかわからないんです。

坂口助手

バカバカしい。そんなの、嘘ですよ。童話の中だけの話です。

菅野くん

あなたたって人は、まだわからないの？ 篠田教授があんなに丁寧に話して

篠田教授

くださったのに。

菅野くん

だって、おかしいじゃないですか。篠田先生の言う通りにしたら、日本

篠田教授

中が、いや、世界中が賢治島になってしまふ。

菅野くん

それでいいんだ。それが私の夢なんだから。私は間違っていますか、宮沢

篠田教授

先生？

え？

菅野くん

私は間違っていますか、宮沢先生？

篠田教授

あの、宮沢先生って？

黙りなさい、菅野くん。

菅野くん

私はこれからも、賢治島を探し続けます。それでいいんですね、宮沢先生？

篠田教授

〇〇さん（日替わりキャスト）がうなずく。その時、風が吹く。

菅野くん

風だ。

篠田教授

あの風を追いかけよう。あの風の行く先に、賢治島はきっとある。

さらに、風が吹く。その風を追いかけて、十二人が歩き出す。

^
幕
v